

— Impact the Next Industry —



KEYWORDS

- 「技術に堪能なる士君子」の養成
- 知の社会実装と知の循環
- 知のエコシステム



選ばれる大学、 そしてかけがえのない大学へ — 知を社会に実装する大学へ —

2026年5月26日 九州工業大学 学長 安永 卓生

見失わないもの：不易流行（松尾芭蕉）

建学の理念（ミッション） 「技術に堪能なる士君子の養成」

未来を思考する「ものづくり」と「ひとづくり」 最先端にもできないことを

私たちのビジョンは「未来思考」。
大切なのは、まだ見ぬ未来にどう立ち向かうか、だ。

たとえ最新の技術でも、
誰も経験していない課題は太刀打ちできない。

そこで、私たちは思考する。
想像が、技術とかけ合わさって革新になる瞬間まで地道に、愚直に、何度でも。

さあ、世界が解決策を待っている。
頭の中にある景色を、その手で現実にするんだ。

大切にしたいこと：九工大がもつ力

ビジョン作成時のコメントより抽出

尖ることを恐れない

やること・やらないことを、**大学として決める**

やってみて、途中で直す

計画を固定せず、**学びながら改善する**

翻訳して、つなぐ

専門の深さと、**橋渡しの価値を両立する**

学生に還元する

すべての活動の最終受益者を、**学生（学ぶ者）に置く**

学生：学びを通して知と価値を**創造**し社会に接続する**生成過程**の主体

「三つの危機」

— 大学の前提が変わり始めた —

社会構造の変革：人口減少

学部中心モデルの限界

→ **「学び増し」**文化としての**学び続ける**大学へ。**「再投資」可能な構造**の形成

外部環境の変化：AI・技術の革命的变化

知識偏重の限界

→ **判断と実装**へ

組織の課題：

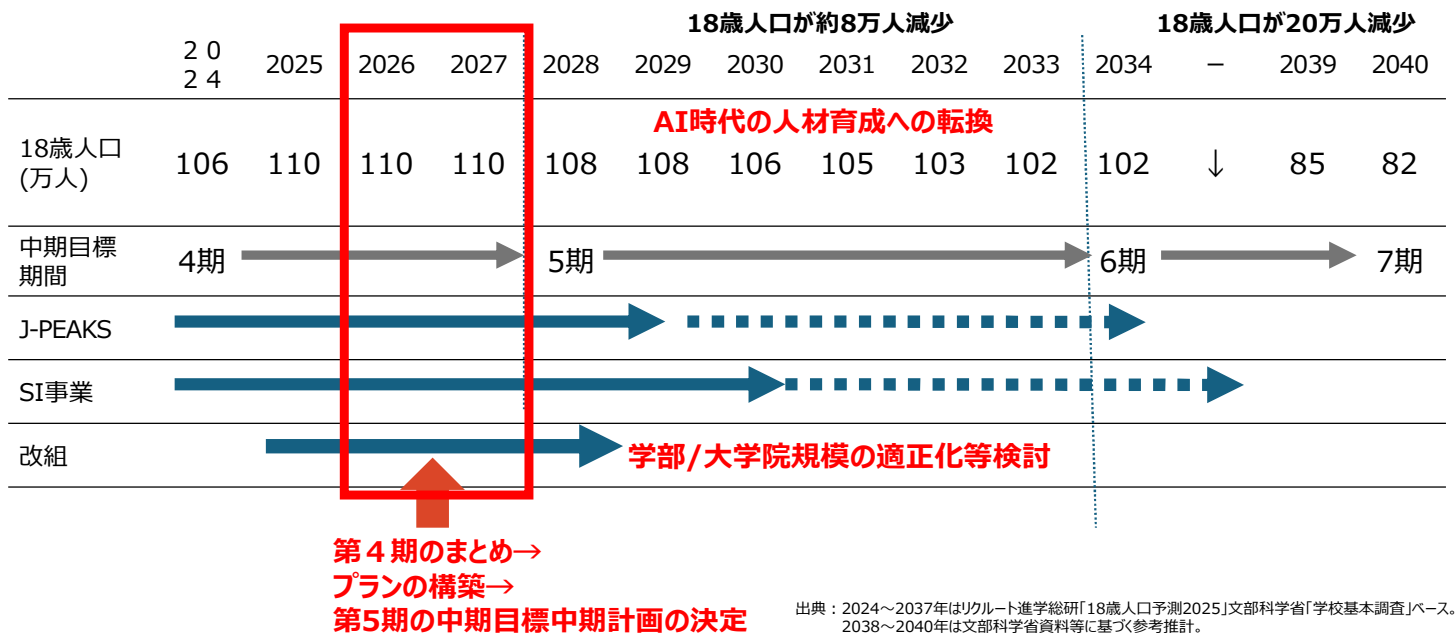
固定化した運営・組織の制度疲労

→ **連携・統合・接続型**などの柔軟な運用が可能な組織へ

→ 大学は、“卒業までの場所”から、“何度でも接続し直す循環の場”へ

待ったなしの時間軸

18歳人口減少と第5期中期目標期間



九州工業大学の目指す方向性

- Impact the Next Industry -

平和で豊かな社会実現に向けた価値提供最大化

九工大の価値

- 地域・社会との連携と調和
- 実践型卓越人材の育成
- 地球規模課題のソリューション提供
- 学生・教職員の満足

九州工業大学ビジョン2040

“未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」”を推し進め、最先端の技術と人材で世界にインパクトを与えるイノベーション創出大学となる。

<Impact the Next Industry>

時代を先き取りした「モノづくり」

ディープテックシーズを社会実装可能な技術に昇華させるための仕組みを整備し、九工大をハブに学術界から創出される革新的な技術を産業界にシームレスに社会実装していくイノベーション創出大学モデルを確立する。

社会の求めに応じた「ひとづくり」

グローバルに活躍できる社会実装の担い手として学部学生から博士学生までを育成するとともに、社会人教育にも積極的に取り組み、我が国や地域の産業・経済の活性化に貢献できる、かけがえのない人材を送り出す。

イノベーション創出とかけがえのない人材の輩出による国や地域への社会貢献

未来を思考するモノづくりとひとづくりから生まれる新たな価値の社会実装、かけがえのない人材の輩出により、国や地域へのインパクトと存在価値を高め、地方の国立大学法人の持続的成長モデルとなる。

九工大の役割：知の社会実装機関

大学は、**知を社会に再配置する機関**

クラーク・カーの言葉（1960年代 米国）

大学：知と価値の循環と社会実装システム

教育・研究で生まれた知を、価値として社会に結び付ける

知と価値の創造（つくり）



社会と**接続**（つなぎ）



社会と**共創**（ともにつくり）



社会へ**実装**（**捨てる(こしらえる)**、**編み直す**)

社会連携は目的ではなく、
教育・研究の価値創造のための手段

「捨てる」：単につくるのではなく、現場に合わせ、手を入れ、使える形に仕立てるという意
山川健次郎「唯単に技術者を捨てるのみの学校ではない」

AI時代となり、なにが変わってきているのか

「知識が足りない」時代から、
「判断を必要とする」時代へ。



かつて

知識へのアクセスが
競争力

これから

判断が競争力
何を正解とするかを選び（比較）、
その責任を引き受ける時代へ

九工大は、Impact the Next Industry

新たな知の創出、知の発信、知の利活用までも視野に入れた知のプラットフォームへ

九工大：知のプラットフォーム

- “知識を教える場所”から“知が循環する基盤”へ
 - 大学が創出する**専門知**（論文等）
+ **実践知、業務知**との接続
 - 教育による接続
 - 研究による接続
 - 社会実装による接続
 - **点と点から面での接続**
 - 連携協定を通じた組織対組織での接続による、社会実装の強化と知の創発
- 挑戦者が挑戦者をよぶプラットフォームとしての九工大
 - ※ **人・知・データ・資源の相互作用を通じて、価値創造と再投資を持続的に回す基盤**
(知→価値→資源→再投資)

面での接続：連携協定による社会実装の拡張

事例紹介

JAIMA（日本分析機器工業会）

研究DX・データ基盤に関わる包括協定

北九州商工会議所

北九州の企業との連携に向けた包括協定

ギラヴァンツ北九州＋ウイングアーク1st

スポーツ分野でのデータサイエンスによるDX人材育成

九州工業大学と研究DX・データ基盤に関わる 包括連携協力協定を締結

一般社団法人日本分析機器工業会(JAIMA、東京都千代田区神田錦町 2-5-16、会長：足立正之/株式会社堀場製作所 代表取締役社長)は、国立大学法人九州工業大学(福岡県北九州市戸畑区仙水町 1 番 1 号、学長：安永 卓生)と、MaaS(※)の国内外における普及と、その活用による先端研究基盤創設のための研究DX・データ基盤の発展を目的に、国際標準化、人材育成、関係機関との連携等の取り組みを共同で推進するため、包括連携協力協定を 5 月 15 日に締結しました。



九州工業大学 JAIMA 締結式

多様な主体が交わる未来思考型エコシステム

— 知の社会実装と付加価値の創出

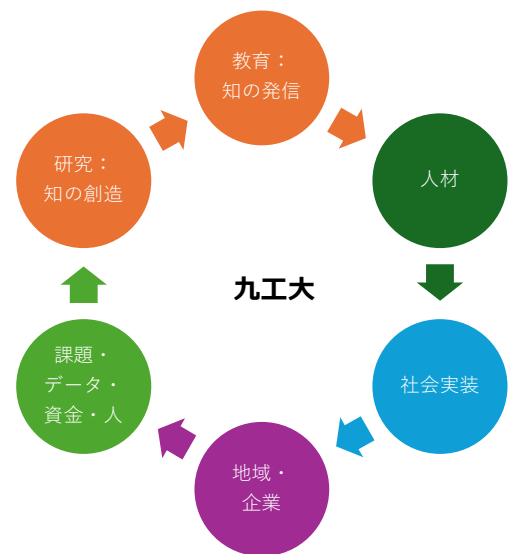
- 教育：知の発信と人材の創出
- 研究：知の創造と共同研究の実装
- 社会実装：価値創造と社会との連携
- 還流：人材・課題・データ・資金
 - 具体施策
 - SI事業、J-PEAKS、Kyutech ARISE

開かれた「知の創造と発信」のエコシステム

大学の中で教育・研究を完結する道ではなく、

- 学生
- 企業
- 地域
- 留学生
- 社会人
- スタートアップ

多様な主体が接続し、循環し続ける大学を目指す



知の循環を支える教育改革

知のエコシステムの中で、知のプラットフォームとしての九工大
知が接続し、**社会実装**による試行を通したかけがえのない人材の育成

- **全学改組：1学部1学科 主専門+副プログラム**
専門性を維持しつつ、
社会に応える人材の育成のための多様な学びの提供
- **SI事業(APUとの連携)：共修科目の必修化と副プログラム**
大学間接続によって、新しい学びの循環
- **Kyutech ARISE：生涯学び増す大学の基盤**
大学における正規学生への専門分野の教育
→ 社会・産業界との教育の接続+社会人教育

「稼ぐ」大学への転換

稼ぐ：再投資可能な大学経営

- 価値とコストが「不透明」 → 「見える化」
- 個別最適 → 「全体最適」
- 消費 → 「投資」
- 属人的運営 → 「データ駆動型」
- 閉じた組織 → 「研究基盤拡充」
「接続・連携型大学」へ

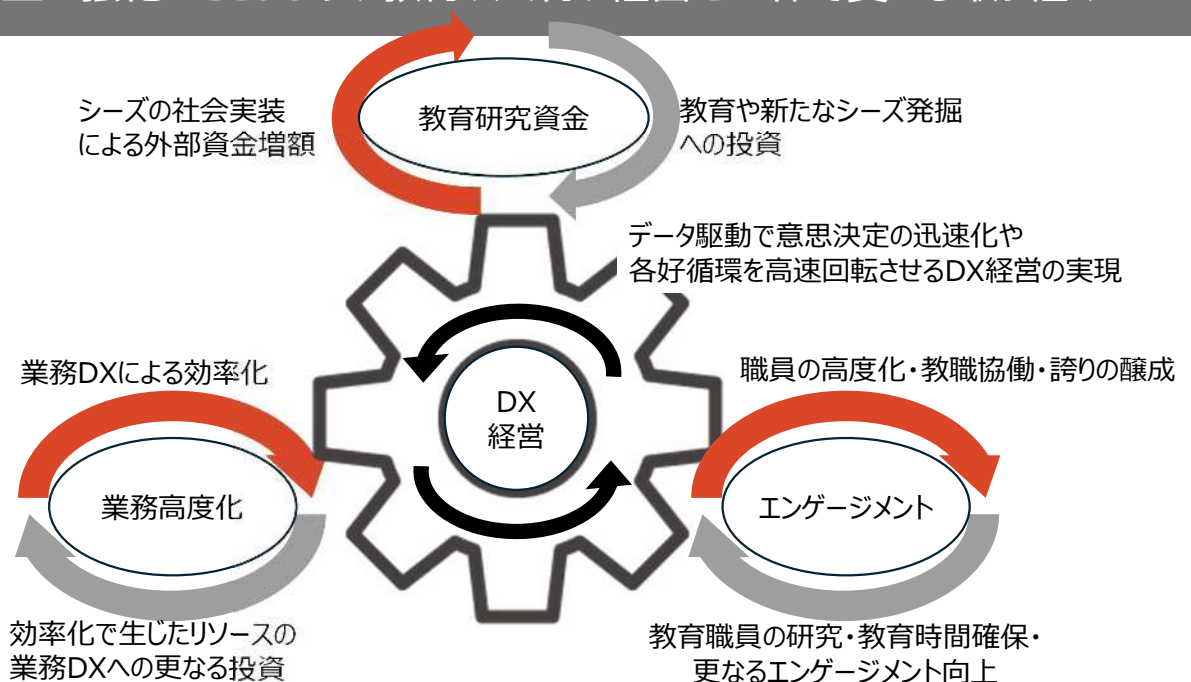
「稼ぐ」とは利益追求ではなく、教育・研究へ再投資する力を持つこと

- 教育価値（人）
- 研究価値（知）
- 社会的価値（実装）

それを再投資に繋げる → 挑戦者が挑戦者をよぶプラットフォームとしての九工大
プラットフォームは接続の基盤であり、エコシステムはその上で知と価値が循環する状態

J-PEAKS: ビジョン実現に必要な3つの好循環への展開

研究基盤の強化にとどまらず、教育、人材、経営を一体で変える取り組み



挑戦者のプラットフォームとしての九工大

不易流行

基盤：大学の理念、教育/研究を支え、多様性を受け入れる文化

革新：教育・研究・大学運営に至るまでイノベーション

「選ばれる大学」であるだけでなく、

社会にとって、

地域にとって、

産業にとって、

「かけがえのない大学」へ

選ばれる大学から、推奨される大学へ。

多様な人材と社会が九工大に接続し、

その経験を次の挑戦者へつないでいく仕組みを育める（こしらえる）